

---

 書 評 ・ 紹 介
 

---

Holly R. Barcus and Keith Halfacree

*An Introduction to Population Geographies: Lives across Space*

Routledge, 2018, 397p.

本書は、人口地理学の入門書であるとともに、出生・移動・死亡という従来の枠を超えて、ライフコース概念を軸に人口地理学を再構成することを試みた著作である。

第1章では、人口地理学の歴史が簡潔にまとめられ、1980年代以降の人口地理学が、構造主義やポストモダニズム、ポスト構造主義といった社会理論の発展から取り残されているとの指摘がなされる。そして、諸社会理論の成果を取り入れた人口地理学を構築するため、ライフコース概念を中心に据えることが提案される。第2章ではライフコース概念が論じられる。出生から死亡まで定められたステージをたどると捉えるライフサイクル概念とは異なり、ライフコースでは多様性が重視される。この章では続けて、ライフコースの差異をもたらす代表的な要素として、歴史、地理、階級・地位、健康・障害、人種・エスニシティ、宗教、性・ジェンダー、セクシャリティ、個性に関する社会科学全般での議論が紹介される。続く章は各論で、第3章で世界の人口分布、第4章で出生、第5～9章で人口移動、第10章で高齢化と死亡が論じられる。最後の第11章では、21世紀の世界の人口問題と、それを踏まえた今後の人口地理学の展望が示される。

人口地理学では人口移動に重きが置かれることが多いが、本書も全11章のうち5章で migration を扱っている。はじめの第5章では、migration の定義が問い直され、日常的な移動から国際移動までを含む mobility の連続体の一部として migration を捉える見方が紹介される。また、既存の migration 研究に見られる学問分野や方法論上の分断を、ライフコース概念によって統合することが提案される。

第6章では、第5章で提示された mobility の連続体の考え方に従い、migration 未満の移動である everyday mobility と residential mobility が論じられる。前者は、通勤・通学・余暇における移動であり、後者は生活様式や社会関係を変えない範囲での近距離の転居を意味する。こうした、通勤と転居を連続体とする見方は、二地域居住や週末婚といった、既存の人口移動の概念ではうまく捉えられない世帯のあり方を包含し得るものとして興味深い。

第7～9章では、背景を異にする3種類の migration が論じられる。第7章が雇用、第8章がライフスタイルを理由とするものであり、第9章が難民等の強制的な migration を扱っている。これらの論点は多岐に渡るが、ライフコースの観点では、migration を process として捉える見方が興味深い。たとえば、第7章では移動してから仕事を探す speculative migration と仕事が決まってから移動する contracted migration とが対比され、第8章では lifestyle retirement migration について、退職の日付を誇張すべきでないとの指摘がなされる。定年に備えてあらかじめ移動するケースや定年後の再雇用が珍しくないためである。第9章では forced migration を、難民キャンプ等の安全な場所への到着、定住地を求めてのさらなる移動、定住地への適応・統合という3段階の process として論じている。

本書では人口学の基礎概念に始まり、関連する諸領域や社会理論が広範かつ簡潔に説明されている。また参考文献も充実しており、さらなる学びの助けにもなるだろう。こうした点では優れた入門書といえるが、既存の人口学・人口地理学の枠組みを問い直すとする筆者の狙いがあるために、人口地理学や人口移動研究全体の見取図を得ようとする目的にはあまり適さないかもしれない。その点では初学者に優しくないが、ある程度経験を積んだ研究者にとっては、自らの方法論を問い直し、新たな気づきを得ることのできる一冊となっている。

(久井情在)